

大阪大学外国語学部イタリア語専攻における 国際交流の取り組み

柴田 瑞枝*



海外交流

International exchange initiatives in the Department of Italian Studies
of the School of Foreign Studies, Osaka University

Key Words: International exchange, Studying abroad, Italy, EXPO 2025

はじめに

筆者の所属する大阪大学外国語学部イタリア語専攻では、さまざまな形で国際交流を推進している。本稿では、近年本専攻で実施されてきた主な取り組みについて、いくつか紹介したい。

大阪・関西万博

2025年4月から10月にかけて開催された大阪・関西万博では、ファルネーゼのアトラスや、カラヴァッジョの『キリストの埋葬』、ティントレット画『伊藤マンショの肖像』など、名だたる展示品が注目を集めたこともあり、イタリア館の連日の賑わいが各種メディアで報じられた。大阪大学外国語学部イタリア語専攻からも、10名の学生がイタリア館の専属アテンダントとして参加し、館内案内や来訪者の観覧支援などの業務に従事した。現場では、英語およびイタリア語の高い運用能力に加え、チームワークや状況に応じた柔軟な対応力が求められたが、雇用担当者の報告によれば、学生たちは採用時の課題や事前研修にも積極的に取り組み、約半年間にわたり、イタリア館の運営を着実に支えたという。採用者のなかには、イタリアへの長期留学経験をもたない2年次生も含まれていたが、本専攻では日頃から、未踏の領域にも果敢に挑戦する姿勢を重視し、奨励している。今回、学生たちが主体的にイタリア語を実践できる職場を選び、業務を通して多くの学びを得ながら成長していく姿を見せてくれたことは、教

員一同にとっても大きな喜びであった。

また、万博会期中には、学習の一環として本専攻の学生がイタリア館を訪れる機会も複数回設けられた。館内では週替わりで各州の魅力を紹介する企画が行われ、それに合わせて、イタリア各地の大学によるイタリア語学習普及などを目的としたワークショップが実施された。なかでも、日頃から交流のあるヴェネツィア大学(ヴェネト州)およびシエナ外国人大学(トスカーナ州)によるワークショップには、イタリア語専攻の教員とともに、1年次から4年次までの有志学生が参加し、先方の教員や学生とイタリア語を用いて直接交流する貴重な機会を得た。ここで行われたような、学習レベルの異なるイタリア語学習者同士が、いかにして円滑にコミュニケーションを図るかという問題提起は、近年ますます多様な背景をもつ移民を抱えるイタリア社会ならではの発想とも言えるかもしれない。教員・学生双方にとって、イタリア語学習および教育を、新たな視点から捉え直すひとつのきっかけになったように思う。こうした取り組みは、万博という特別な機会があってこそ実現した国際交流の形態であるが、これを一過性のものに終わらせず、教員間・学生間、さらには大学間の交流へと継続・発展させていくことが重要である。

イタリア留学

外国語学部イタリア語専攻では、1・2年次にイタリア語の基礎力を養うカリキュラムを整備しており、多くの学生が3年次秋以降に本格的なイタリア留学に出発する。留学形態は多様で、協定校への派遣留学のほか、大学や語学学校への私費留学という選択肢もあり、期間も長期・短期さまざまである。

2025年1月現在、本専攻はヴェネツィア大学、ミラノ大学、トリノ大学、ナポリ東洋大学と交流協定



* Mizue SHIBATA

1984年3月生まれ
東京外国語大学大学院 総合国際学研究所 博士後期課程修了(2015年)
現在、大阪大学大学院 人文学研究科 外国語専攻 助教
TEL : 072-730-5176
E-mail: mshibata.hmt@osaka-u.ac.jp

を結んでいる。例年、学内の厳正な審査を経て選抜された3・4年次生が、半年から一年程度、派遣先で学修や生活を通じて研鑽を積んでいる。また、箕面キャンパスでは、協定校から交換留学生として来日したイタリア人学生と本専攻の学生が、互いに母語を教え合いながら切磋琢磨する姿が見られる。

一方で、本専攻では2015年以降、2年次の有志学生がシエナ外国人大学で約1か月の夏季語学研修を行うことが慣例となっていたものの、近年は参加者数の減少が見られる。その背景には、長期的な円安や物価高騰による経済的負担への懸念もあると考えられる。長期留学ではなく短期留学を選択する学生や、留学そのものを躊躇する学生が増えている印象もあり、学生が希望通りに留学に出発できていないとすれば、この点は残念である。教員としては、奨学金制度の周知など、限られた支援しかできない歯痒さを感じつつも、経験上、留学は多少の困難があっても挑戦する価値があることを、折に触れて学生たちに伝えている。自らのコンフォートゾーンを越えて異文化に触れることで、きっと自らの強みや、新たな面を発見できると考えるからである¹⁾。また、留学準備の過程では、滞在先探しやビザ申請など少なからず手間はかかるが、それらも含めて、後に振り返ればかけがえのない経験となる。専攻内では、近頃、留学経験者が後輩のために自発的に「留学説明会」を開催する動きも見られ、教員としても心強く感じている。

イタリア語弁論大会

イタリア留学を経験した学生の多くが口にするのが、現地の人々とのかかわりを通して、自身のものの見方や価値観が大きく変化したという実感である。2025年12月6日に京都外国語大学で開催された「第18回全日本学生イタリア語弁論大会」に出場した本専攻の2名の学生も、それぞれの留学経験をもとに、異文化交流を通して何を感じ、世界の捉え方や自己理解がどのように変化したかを、自らの言葉とジェスチャー(イタリア人が話すときにジェスチャーを効果的に用いることはよく知られている)を駆使して表現豊かに発表した。

彼女たちの弁論は、美しいイタリア語表現のみならず、ひとりの人間としての成長を感じさせる内容が際立ち、留学がもたらす異文化交流の意義を、聴

衆に強く印象づけるものであった。大会では、競い合う立場にある参加者同士が互いの健闘を称え合う姿も見られ、イタリア語およびイタリア文化を愛する者同士の連帯を感じさせた。なお、本専攻の2名の弁論者には、審査員を務めたイタリア文化会館館長シルヴァーナ・デ・マイオ氏らより、駐日イタリア大使賞および京都外国語大学理事長賞がそれぞれ授与された²⁾。

海外の研究者による特別講義

本専攻では、海外から作家や研究者を招いて特別講義を行う機会も積極的に設けている。2025年6月5日には、イタリア文化会館大阪との共催により、マリオ・バルンギ、ブルーノ・ファルチェット、ラウラ・ディ・ニコラ、和田忠彦といった著名な研究者を招き、「再発見 日本におけるイタロ・カルヴィーノ (*Riscoprire Calvino in Giappone*)」を開催した。また、2024年10月には、作家ダリオ・ヴォルトリーニ氏が最新作の執筆経緯を語り、2025年10月には、マッテオ・B・ピアンキ氏が自作『遺された者たちへ』および自身が設立した出版社について紹介した。第4回京都文学レジデンシーに参加するため来日した詩人フランチェスコ・オットネッコ氏は、イタリア語およびサルデーニャ方言による自作詩の朗読を行い、日本滞在中に創作した詩も披露した。学生たちは、イタリアの作家や詩人たちによって経験され、別の視点から語られる「日本」に強い関心を示し、熱心に聴講していた。

これらの講義はいずれもイタリア語で実施され、学生たちもイタリア語で積極的に質問を行った。学習言語を実際のコミュニケーションの場で運用する、極めて有意義な機会となった。



写真1 特別講義の様子 (1)

おわりに

こうして近年のイタリア語専攻における国際交流の取り組みを振り返ってみると、その多くが学生たちの主体的な意欲によって支えられてきたことがわかる。教員の役割は、交流の場を整え、学生が高い学習意欲を保ちながら、それぞれの潜在能力を最大限に発揮できるよう支援することに尽きる。

人工知能の精度が向上し、簡単な意思疎通であればスマートフォンひとつで可能となった今日、外国語学習の意義そのものが問い直されている。しかし、真に他者とつながり、異文化と向き合い、国際社会で主体的に活動するためには、地道な外国語学習とその実践が、今なお不可欠なツールであることに変わりはない。本専攻では、学生たちの学習意欲を高め、人と人とが結びつく国際交流の場を創出するとともに、彼らの参加を後押しする工夫を続けていきたい。



写真2 特別講義の案内フライヤー

参考文献

- 1) 留学先でインターンに参加する学生もいる。2025年春には、ポロニャ大学に留学中の本専攻学生が日本企業のインターンに参加し、日本からイタリアにサッカー遠征する小学生たちのサポート役を務めた。
Cfr. 株式会社テラ・ヌオーヴァ (2025年4月30日) 「(レポート)大阪大学の学生も活躍! 25回目のイタリアツアー終了」[プレスリリース]. PR TIMES. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000006.000135766.html> (2026年1月10日閲覧)
- 2) 京都外国語大学・京都外国語短期大学 (2025年12月11日) 「第18回全日本学生イタリア語弁論大会 結果報告」 <https://www.kufs.ac.jp/news/detail.html?id=KsO4lsUr> (2026年1月10日閲覧)



写真3 特別講義の様子 (2)

